

林業試験場道南支場から「発見」された1920～70年代の 植物標本について（下）—発見から保存までの経緯—

新田紀敏・徳田佐和子

1 はじめに

前報では北海道立総合研究機構林業試験場道南支場（以降「支場」）内の倉庫から見つかった植物標本（以降「支場標本」）について、体裁と保存状態の概要、採集地や採集された植物の特徴などについて報告しました。今回はだれがどこで採集し、どのように扱われてきたかを概観し、支場標本の価値と今後の取り扱いについて考えます。

2 標本の採集から今回の再整理までの経緯

支場標本の採集は1924～30年と1973～77年の道南地域、1956～62年の十勝地域と大きく3つの時期・地域に分かれていました。標本ラベル以外に採集や保管に関する記録がほとんどなく、100年に及ぶ時間の経過と経緯の複雑さから長くなりますが、ここでは主にラベルから読み取った内容から時系列に経緯を整理しました。関係者の敬称は省略し、人事異動は各年の北海道（庁）職員録によります。

(1) 最古の標本群期 1924～26年

残っている最も古い標本は1924年10月塚本採集のハマエノコロでした（写真-1）。この時期は次の時期へつながっていますが、採集者が2人に限られ、標本点数も多くはありません。特筆すべきは採集者の一方が職員名簿にない塚本と書かれていることです。姓のみですが、1920年代に函館周辺で植物採集をしていた塚本姓の人物は、植物研究者の山本岩亀と共著で函館植物志を著した塚本角次郎だと思われます。塚本は1910年生まれで、尋常小学校時代の1922年頃から植物採集を始め、旧制函館中学校に入学してからは本格的に函館周辺の植物を収集していたようです。その後、山本に見出されて函館植物志の調査に従事するのですが、植物調査のために湯ノ川から奥の山地へ入っているため、手続き等でこの一帯の森林を管理していた湯ノ川森林事務所へ入りし、この頃から植物採集を始めていたもう一方の採集者で同職員の岡田銀治郎と知り合った可能性があります。市立函館博物館には塚本が集めた標本が寄贈されていますが、その中に岡田採集の標本が3点含まれています。これらのことから2人は標本交換をしながら調査を進め、岡田に贈られた塚本標本が支場に、塚本に贈られた岡田標本が市立函館博物館に保管されていたと考えられます。この時期は、塚本に影響を受けた岡田が、その後森林事務所の職員とともに本格的に標本採集を始める契機だったとも考えられます。

(2) 北海道庁拓殖部湯ノ川森林事務所時代 1927～30年

前出の岡田銀治郎が責任者となって湯ノ川を中心に道南地域の植物を広く採集しています。採集者として同事務所の井上金一郎、木村富治、戸田東、1930年に拓殖部地方林課へ転出した皿井廣、所属不明の加我兼義、藤谷牧夫などの名が確認できます。この時のラベルの筆跡はほとんどが同一なので、岡田が一人で整理したようです。

その後、湯ノ川森林事務所（湯ノ川村）は1934年に函館森林事務所（函館市川原町）、1947年に函館林務署（川原町から1970年に柳町へ移転）と組織・所在地が変遷しますが、標本は1936年に岡田が池田森林事務所へ転出後、入れ替わりに再び異動してきた皿井に引き継がれ、さらに1948年その後継を握ることとなる増田憲二郎が皿井のいる函館林務署へ異動となり、1951年に皿井が転出するまでの間に引

き継いだと思われます。

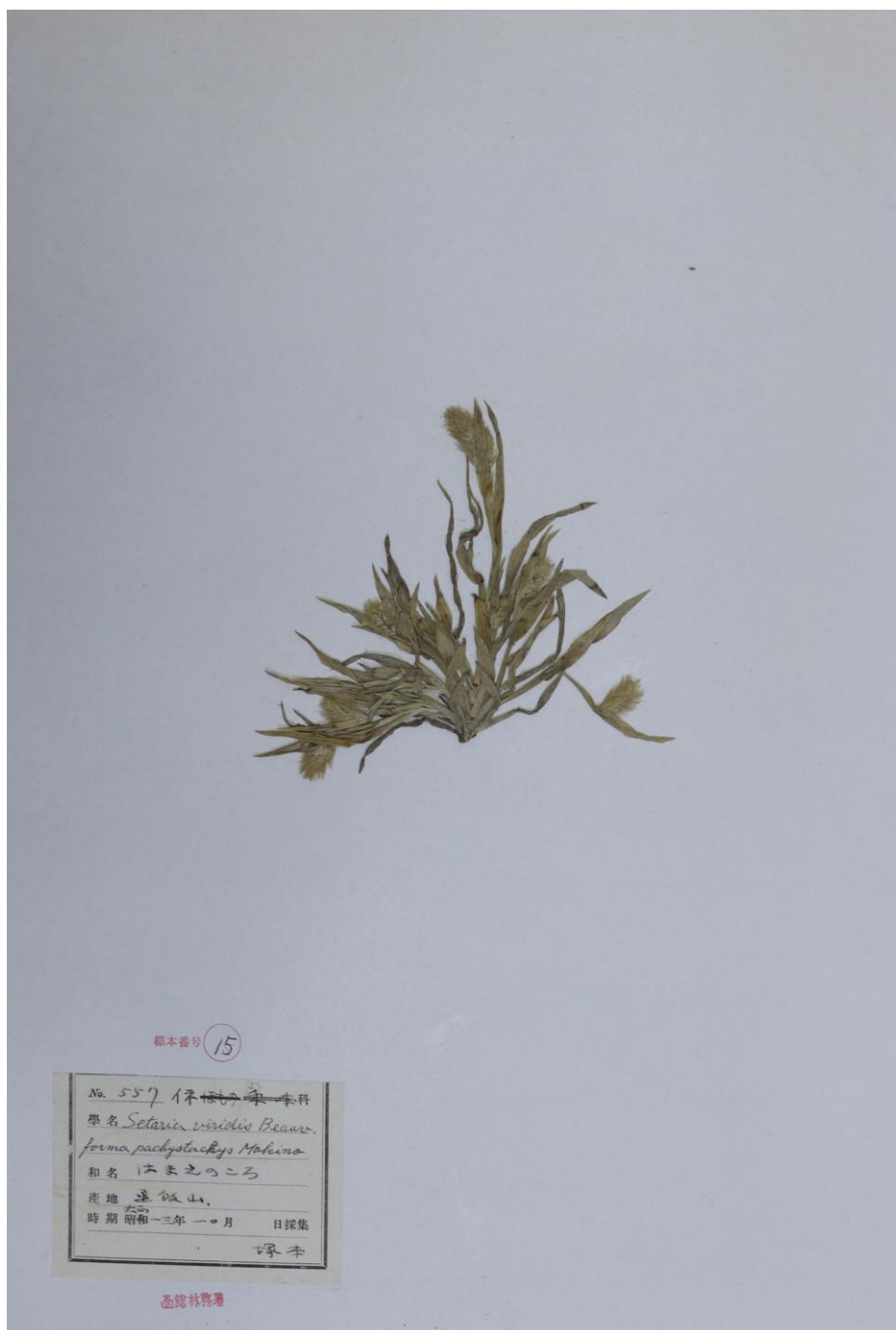


写真-1 塚本標本

採集日が大正13年10月と書かれた最古の標本。

(3) 北海道林務部函館林務署時代 1948~52年

この時期、増田が散発的に植物採集をしていますが、活発ではなかったようです。増田は1952年に林務部道南林課へ転出して行きます。ここまでの道南地域の標本は、函館林務署内で増田によって管理されていたでしょうが、増田が転出した後は、何らかの形で函館林務署内に保管されたと思われます。

(4) 例外的な標本

支場標本には、時期を問わず散発的に東北地方や遠くは九州（写真-2 下）など道南・十勝以外の標本も含まれています。まとまりがあるものとしては、1956年に皿井と増田がアポイ岳へ登り植物採集を

しています(写真-2上)。また、支場標本では最も新しい1977年の採集で、採集者が佐藤利幸となった函館周辺のシダ標本が42点ありました。シダの研究者でもある佐藤は現在信州大学名誉教授です。この標本群は佐藤が北海道大学理学研究科の大学院生になった頃、当時支場にいた館和夫に案内され、函館近郊で採集したシダ標本で、シダの研究を始めた頃の標本とのことです(佐藤私信)。この時の採集品の一部は同行していた後述の永井に託され、標本に仕上げられて保管されていたようで、信州大学に収蔵されているものの重複標本の可能性があります(佐藤私信)。主要標本以外でまとまった数があるのはこれだけでした。

(5) 北海道林務部池田林務署時代 1956~62年、函館林務署時代 1968~69年

1956年に増田が池田林務署へ異動となった後、林務署所在地である池田・浦幌両地区を中心に十勝の植物が広く採集されています。この時期、ラベルの表示名 Y. Yoshida が中心的に忠類での採集をしています。所属が不明です。増田の部下に吉田浅吉がいましたが、イニシャルが異なっています。筆跡からラベルは後年増田が作成したようですが、間違いなのかもしれません。この時期の採集者としては、池田林務署の土肥正豊、浦幌林務署の住友力雄、金沢猛の名が確認できます。残っている目録には、増田が1958年以降池田・浦幌林務署管内及び近隣地の植物を集めたとして記しています(1961年8月1日付)。増田は責任者として採集と整理を行っていたようですが、この標本が函館にあるのは、増田が1968年に函館林務署へ異動の際、移送したためと思われます。この間の1962年には増田は池田林務署から倶知安林務署へ異動となりましたが、標本を管理する後任者がおらず、個人的に保管していたかもしれません。いずれにせよ、1968年に函館林務署で増田の元にそれまでの支場標本すべてが集まりました。多くの標本に「函館林務署」のスタンプが押されていますが、採集時期はまちまちで、函館林務署が設置された1947年以前のものもあるため、スタンプは後年の整理作業で押されたものです。

(6) 林業試験場道南支(分)場時代 1970~2023年

1970年、増田は設置間もない道南分場(現支場)長となります。この時に全標本が分場へ移管されたと考えるのが自然でしょう。その後、1973年にラベル表示名 E. Nagai こと永井永蔵が分場職員となり採集に加わります。増田と永井は1973年から西は奥尻町、東は尻岸内町(現・函館市恵山)の範囲で採集していましたが、1976年には支場構内の植物を植栽種を含めて網羅的に採集しています。採集とともに

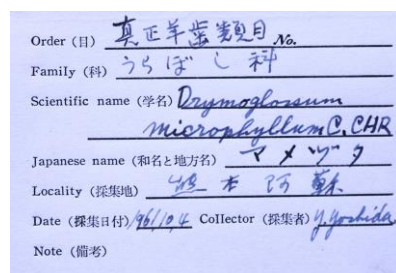


写真-2 例外的な標本の例

日高アポイ山(岳)産の標本(上)と熊本県阿蘇と書かれたラベル(下)

に整理を進め、整理を終えた標本は最終的に収められていたキャビネットに入れられ、入りきらなかった木本類は段ボール箱に詰められたと思われます。1977年には台帳の修正版が作られているので、この時までには標本の採集・整理をひととおり終えたと思われます。記入された数字に訂正がありますが、最大1,727点に達していたことが書かれています。今回見出した標本のうち前報で述べた「標本番号」をつけられて仕分けされたもののみを数えると1,739点となるので、重複標本等の数え方の違いだけで台帳記載標本に該当するものがすべて2023年まで残されていたと考えられます。

1990年頃、最終的に標本が置かれていた支場敷地内の公宅が空き家となり、キャビネットと段ボール箱が移されたようです。2023年には、筆者のうち徳田が支場長となり支場標本を「再発見」しました。筆者のうち新田は徳田に依頼されて標本の内容を確認するとともに傷みの激しいものを処分するなど再整理して、美唄市の林業試験場標本庫へ運んで保管しています。

採集者と採集地域の変遷や主要な人の動きなどをまとめると図-1のようになります。

最後に一つ大きな疑問があります。標本採集に何らかの目的があったのか否かということです。研究機関として支場内の植物を採集したことは理解できるとしても、それ以前は標本の内容を見る限り、森林を管理する行政機関として必要とされたものとは見えません。現在のところ、他の森林事務所・林務署でも標本採集をしていたとの情報はないので、個人的な興味ないしは熱意から行っていたのかもしれませんが。それにしても職場内で意義を認められていた形跡もあることから、組織として必要性は認めていたが、職員の能力的限界から限られた地域でのみ行われたということなのではないでしょうか。わからない植物を牧野博士にまで問い合わせるほど熱心だったところを見ると、個人的な熱意が勝っていたようです。それを職場も必要性として認めていたということかもしれません。

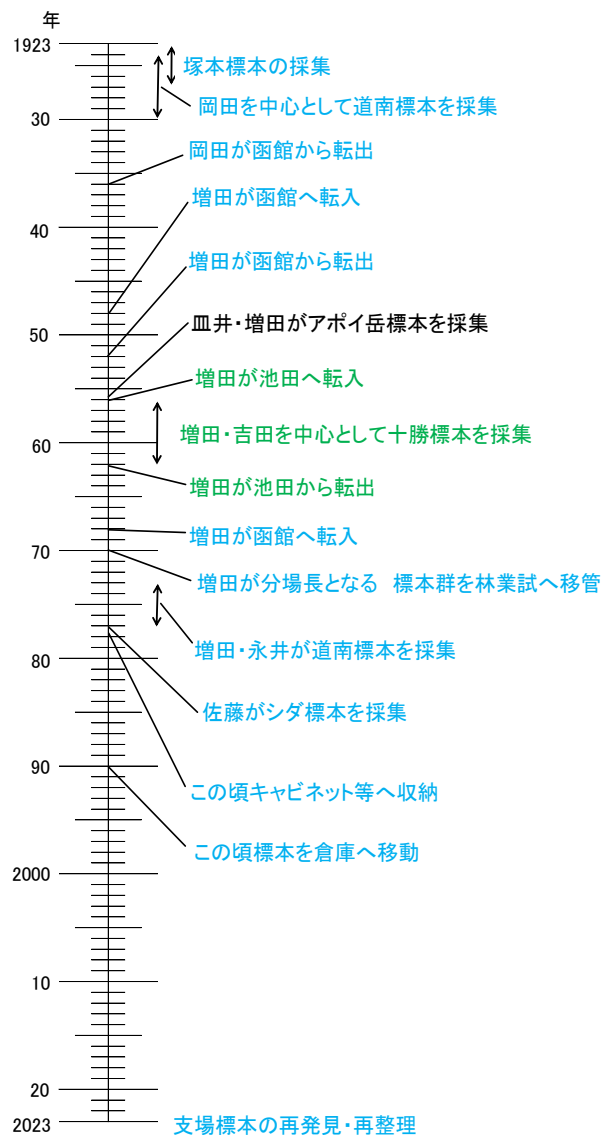


図-1 標本の採集時期と主な出来事

青：函館（道南）、緑：池田（十勝）

3 今後の活用方法

支場標本は支場へ「移管」されるまでは長く函館林務署で保管されていたと思われますが、行政機関では植物標本を適正に管理・活用できないため、研究機関に「移管」したことは賢明な措置でした。しかし、林業試験場もまた死蔵したまま現在に至り、結果的に標本の劣化を招いたことは残念でした。

標本は研究のデータ、あるいは発表論文の証拠とする目的で採集することがありますが、その集積は本来無目的・無制限・無期限に行われるものです。多数集まることによって価値が生まれるともいえます。古い例えですが百科事典のようなもので、あらゆるものが網羅されていれば、使う人がそれぞれの目的で利用することができます。保存性も半永久的で、必要があれば解剖することもできます。したがって、標本の価値は現在の視点で判断すべきものではありません。私たちは現に100年以上前から宮部

金吾を始めとした先達が残してくれた標本を研究に利用しています。近年では標本からの DNA 抽出といった数十年前には想像もできなかった利用法が一般的になりつつあります。今後 100, 200 年と保存され得る植物標本は将来の技術開発によってさらに様々な利用が進むと期待されます。支場標本も過去の函館周辺や十勝の植物相解析を始めとした研究に活用するとともに、画像や電子データとは違う現物ならではの強みを発揮する将来の新たな利用への道を開いておくことが重要です。今後は長く閲覧・活用に供するため、しかるべき博物館等へ寄贈するよう取り計らうべきでしょう。

4 謝辞

北海道大学総合博物館の首藤光太郎助教には標本庫の閲覧で便宜を図って頂きました。道南支場勤務の経験があった今博計氏、菅野正人氏には当時の標本の保存状況などをご教示いただきました。職場の大先輩である館和夫氏には支場の昔のことを教えていただきました。市立函館博物館の大矢京右氏には塚本角次郎の経歴と収蔵標本の内容を教えていただきました。佐藤利幸信州大学名誉教授には標本採集当時のことを教えていただきました。内田暁友氏には佐藤名誉教授への問い合わせを取り次いでいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

(保護種苗部保護グループ・道南支場)